

インクルーシブ教育のあり方について
—幼児教育現場における教員の関わり方について—

室谷 雅美・大塚 貴之・稲田 達也

How to Adopt the Inclusive Education
—Considering the way Teachers Do in Early Childhood Education—

Masami Muroya, Takayuki Otsuka, Tatsuya Inada

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

インクルーシブ教育のあり方について —幼児教育現場における教員の関わり方について—

How to Adopt the Inclusive Education —Considering the way Teachers Do in Early Childhood Education—

室谷 雅美・大塚 貴之・稲田 達也

Masami Muroya Takayuki Otsuka Tatsuya Inada

1. はじめに

昨今、義務教育段階の全児童数が減少傾向にあるなかで、特別な支援が必要な児童生徒が増加傾向にある。文科省の発表によると、平成27年5月1日現在、特別支援学校（幼稚部・小学部・中学部・高等部）に在学する幼児児童生徒数（国・公・私立計）は、137,894人である。

インクルーシブとは、「包括的な」「包み込む」という意味であり、インクルーシブ教育というのは、障がいのある者となない者が共に学ぶことを通して、共生社会の実現に貢献しようという考え方である。インクルーシブ教育という言葉が広まり始めたのは、1994年にUNESCOによって開かれた国際会議がきっかけだと言われている。この国際会議で「Education for All（万人のための教育）」がうたわれ、可能な限りすべての子どもの能力や困りごとに応じた教育を行っていく方向性が公に打ち出された。また、2011（平成23）年8月に障害者基本法が改正され、「可能な限り障害者である児童及び生徒が障害者でない児童及び生徒と共に教育を受けられるよう配慮」（16条）するとされた。

さらに付け加えると、岩井・水野・酒井各氏^{注1)}は『インクルージョン（inclusion）＝「包括（含める）」とは、「最初から、障害幼児もどんな幼児も含める」という意味である。特別な教育的ニーズのある幼児すべてを含めて受け入れる理想的な幼稚園・保育所を目指すのである。障害幼児の保育に必要な様々なスタッフや施設・設備を整えて、健常児と障害幼児とが幼稚園・保育所で一緒に生活するのである。つまり、インテグレーションを発展させたものがインクルージョンである。』と、述べている。

文科省では、早期からの教育相談・支援が必要であるとされ、「子ども一人一人の教育的ニーズに応じた支援を保障するためには、乳幼児期を含め早期からの教育相談や就学相談を行うことにより、本人・保護者に十分な情報を提供するとともに、幼稚園等において、保護者を含め関係者が教育的ニーズと必要な支援について共通理解を深めることにより、保護者の障害受容につなげ、その後の円滑な支援にもつなげていくことが重要である。また、本人・保護者と市町村教育委員会、学校等が、教育的ニーズと必要な支援について合意形成を図っていくことが重要である。」とし、さらに、「乳児期から幼児期にかけて、子どもが専門的な教育相談・支援が受けられる体制を医療、保健、福祉等との連携の下に早急に確立することが必要であり、それにより、高い教育効果が期待できる。」^{注3)}と、記している。

今日、教育分野の重要課題として、一人ひとりに応じた指導や支援（特別支援教育）に加え、障がいのある者と障がいのない者が可能な限り共に学ぶ仕組み（インクルーシブ教育システム）を構築することであるとされている。

2. 目的

幼稚園教諭・保育士を目指す学生が、障害児の受け入れをどのように考えているのかを知るとともに、インクルーシブ教育の基本の考え方や、実際にはどのように教育に活かされているのか、インクルーシブ教育のあり方や幼児教育の現場において何を最重要視として障害児と関わるかについて考えることを目的とする。

3. 調査方法

(1) 調査時期・調査対象

平成29年10月に「インクルーシブ教育」について、N専門学校在籍中の学生を対象にアンケート調査を実施した。対象は、調査当日出席した81名である。

(2) 調査内容

西木氏の「保育士養成校の学生が考える障害児保育の専門性」^{注2)}に関するアンケート調査を参考に作成した。調査内容は①インクルーシブ教育の理解度、②障害児を受け入れるにあたり、保育者として必要なこと、③障害児を受け入れるにあたり、子どもへの関わりについて、④障がいに関する理解について、とした。フェイスシートで、性別・学年を尋ねた。

4. 結果

(1) 回答者の性別・学年

回答者のうち、男子21人(30.9%)、女子47人(69.1%)で、学年では、一年生35人(51.5%)、

二年生 33 人 (48.5%) であった。

(2) インクルーシブ教育について

「インクルーシブ教育について知っていますか」という質問に関しては、図 1 に示したとおりである。「良く知っている」は 0 人であった。「知っている」は 4 人 (5.9%)、「聞いたことがある」は 11 人 (16.2%)、「知らない」は 53 人 (77.9%) であったことから、学生の 8 割がインクルーシブ教育に関して、知識を得ていないということがわかった。

「障害児保育」の講義等で、知識を身につけさせる必要があると強く感じられた。

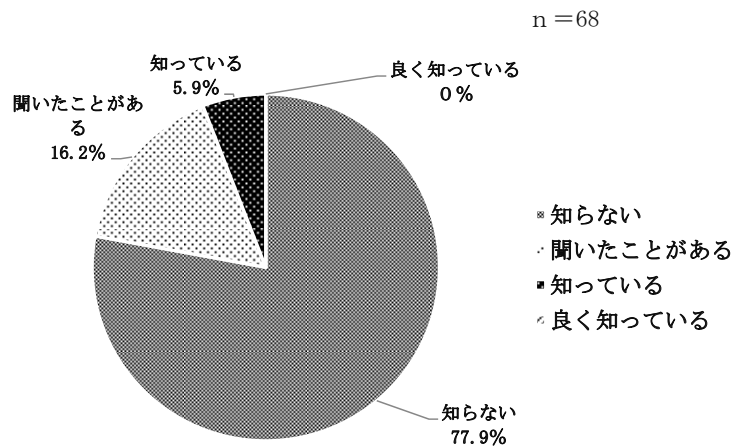


図 1 インクルーシブ教育についての認知度

(3) 障害児を受け入れるにあたり、保育者として必要なこと（複数回答）

「障害児を受け入れるにあたり、保育者として必要なことはなにか」に関しては、図 2 に示したとおりである。全体で最も多かったのが「障がいに対する知識」で 44 人 (64.7%) であった。次いで「子どもを理解する」が 41 人 (60.3%)、「保護者との関わり」が 29 人 (42.6%) であった。

男女別では、大きな性差はなかったが、図 3 に示したように、学年によって差異があった。2 年生は、「保護者との関わり」が 19 人 (57.6%) でもっとも多くなっていることから、実習の経験から得たものではないかと考える。障害児保育の講義の中で一番重要視しているのは、障害児と障害児の保護との愛着関係であるからである。1 年生は、そうではなくまだ視野が狭いため目の前の障害児と自分との気づきを大事であると考えていることから、「信頼」や「援助」、「平等」「愛情」といったことが多かった。

共通して言えることは、「子どもを理解する」や「障がいに対する知識」を保育者として必要

と感じている。

n = 68

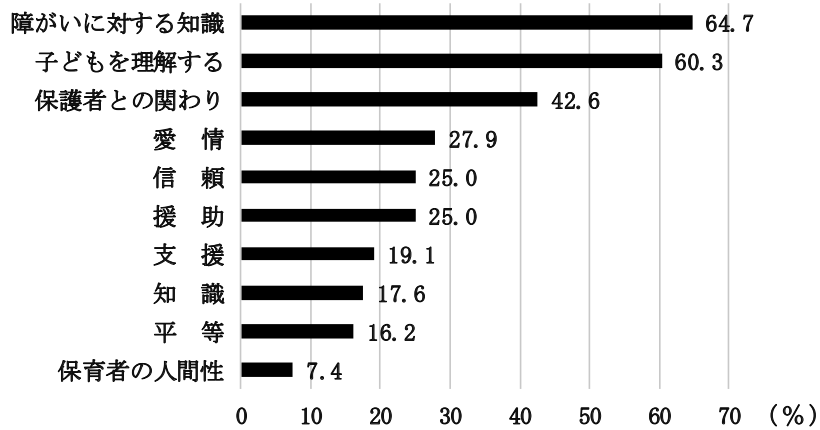


図2 障害児を受け入れるにあたり、保育者として必要なこと (全体)

n = 68

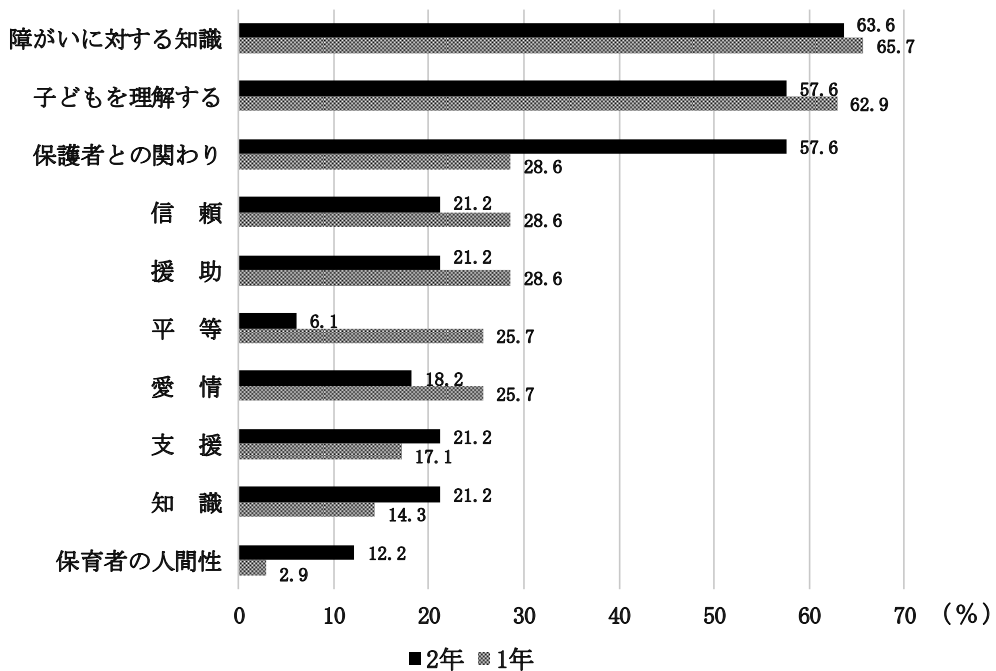


図3 障害児を受け入れるにあたり、保育者として必要なこと (学年別)

4. 障害児を受け入れるにあたり、子どもへの関わり（複数回答）

「障害児を受け入れるにあたり、保育者として必要なことはなにか」に関しては、図4に示したとおりである。全体でみると、「障がいのある子どもが安心できるようにする」が40人（58.8%）、次に「障がいに応じて援助する」が38人（55.9%）であった。

図5に示したように、学年別では1年生では「子どもが安心できるようにする」が25人（71.4%）で、次に「その子に合わせたコミュニケーションをとる」が18人（51.4%）であった。2年生は、「障害に応じて援助する」が一番多く20人（60.6%）で、続いて「その子の心を受け止める」が18人（54.4%）であったことから、1年生と2年生では、子どもへの関わり方には、違いがあることがわかる。2年生は、子どものすべてを受け止めながら障害児保育を考えようとしている。それに対し、1年生は、まずは障がいを持った子どもに対し、落ち着かせようという気持ちが働いている。不適切な行動をとる子どもたちが障害児であると考えているところがあるので、不適切な行動を取り除こうとしている。2年生は、不適切な行動をとることを十分に理解していることから、経験を積んでいることがわかる。

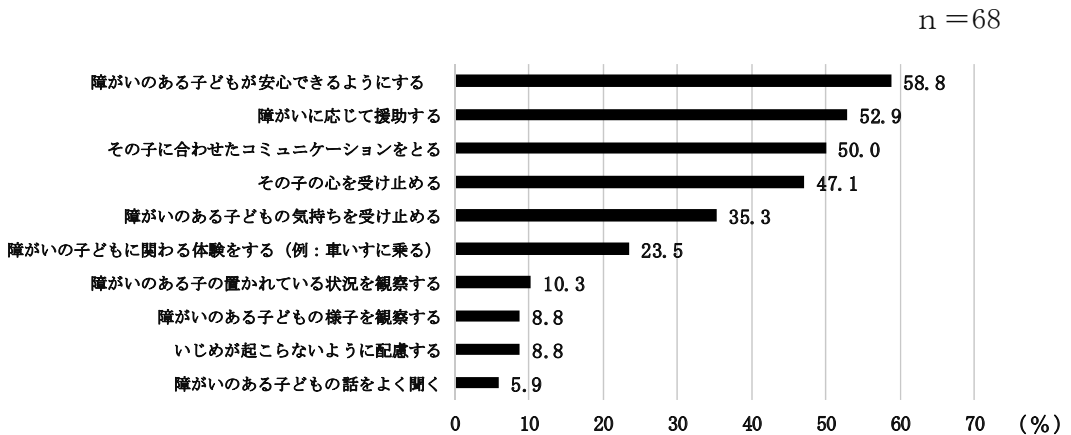


図4 障害児を受け入れるにあたり、子どもへの関わり（全体）

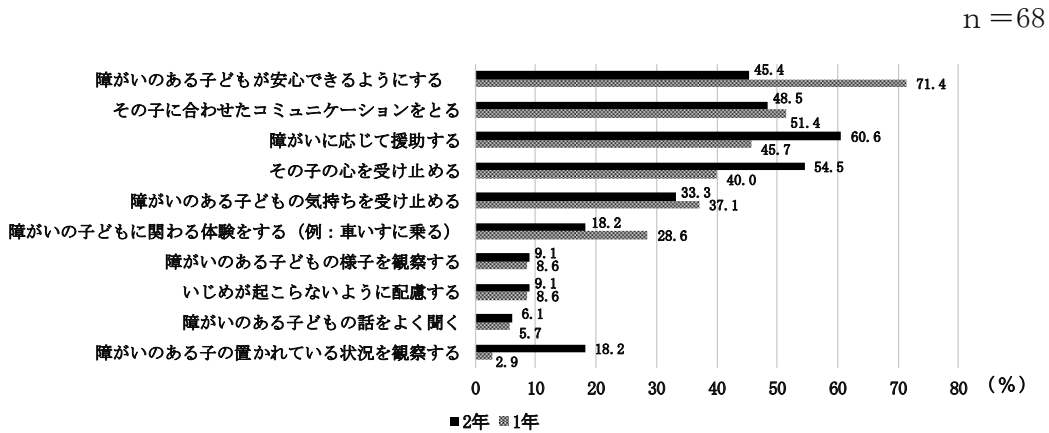


図5 障害児を受け入れるにあたり、子どもへの関わり (学年別)

5. 障がいに関する理解

「障がいに関する理解」に関しては、図6に示したとおりである。全体でみると「障がいについて知識や理解を深める」が38人(55.9%)で一番多く。次に「障害の特徴を知る」が12人(17.6%)であった。「障がいについて知識や理解を深める」ことが必要であると感じている学生が圧倒的に多く、6割近くを占めている。学生は、まず理解をしてから障害児の子どもたちと関わっていかうとする傾向があるのではないかと考える。

学年別でみると、やはり、1・2年生とも「障がいについて知識や理解を深める」が多いが、1年生では「障がいについて学ぶ」が7名(20%)であり、2年生は「障がいの特徴を知る」が8名(24.2%)となっている。どちらにしても、障がいについてまずは知ることからと考えている学生が多くいることが伺える。

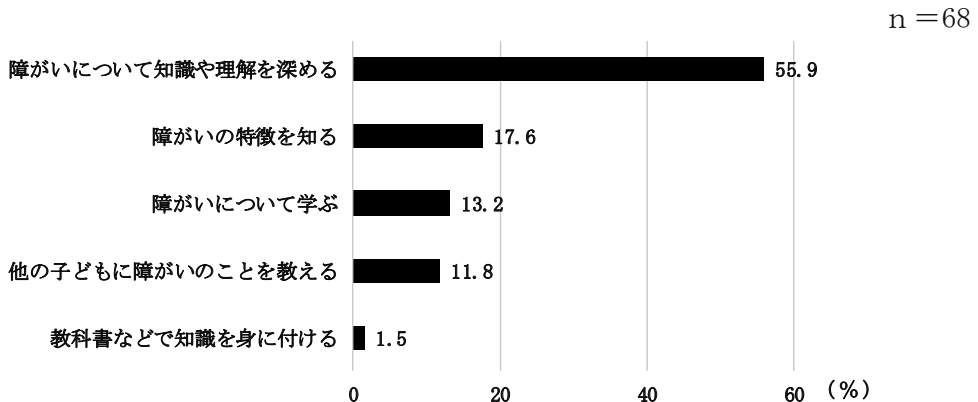


図6 障がいに関する理解 (全体)

n = 68

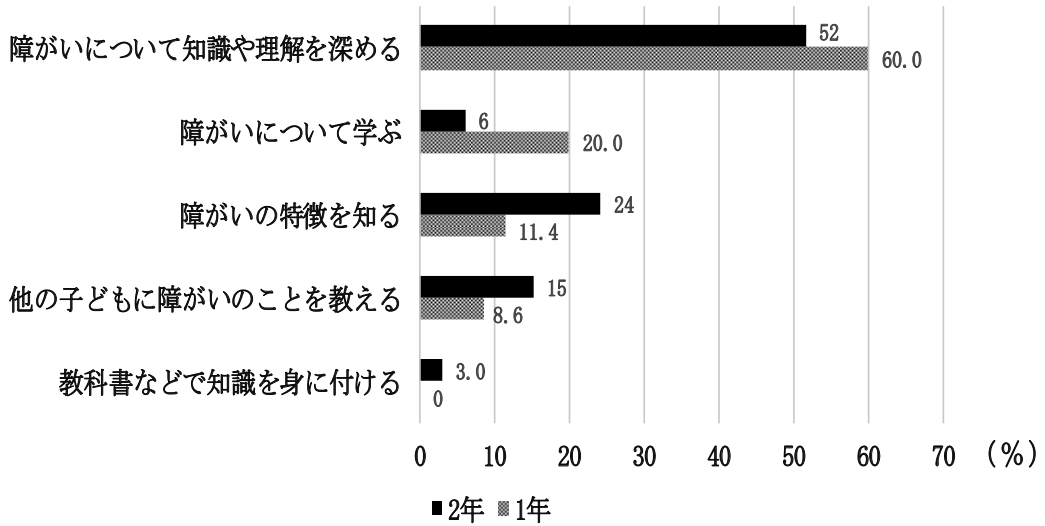


図7 障がいに関する理解（学年別）

6. 考 察

1・2年生とも、「インクルーシブ」という言葉については、知らない学生が多くいたことは、今後の講義に活かしていかなければならないと考える。障害児教育においては関心が高く、1年生においては障害児との関係において愛情や信頼関係を大切にしながら、保育所等の健常児と同じように関わることを目指していることを知ることができた。

2年生においては、1年生よりも深く保育を学んでいるので障害児に対しての知識もあり、障害児のすべてを受け入れるところから出発している。

健常児と同じように受け入れるのではなく、障害児一人ひとりのことを受け止めながら保育をしていくことを知ることができた。

「障がいに関する理解」に関しては、「障がいについて知識や理解を深める」ことが必要と感じていることから、今までの知識などではまだ十分に障がいに関して理解が出来ていないとされていることが伺える。これから、さらに障害児に関する知識を深めてもらわなければならないと考える。

また、障がいに対する知識を学び、障害児への理解を深めることの重要性を学ばなければならない。障害児の保護者に対しての支援が子どもへの影響力に大きく関係してくることを理解していると考えられる。

そのようななかで最重視している具体的な内容が「その子に合わせたコミュニケーション」・「子どもが安心できる環境」・「障がいに応じた援助」であり、「インクルーシブ教育」という言葉の認知度は低い、その理念の内容については、N 専門学校の学生はよく理解できていると考える。

＜引用文献＞

注1) 岩井淳二・水野薫・酒井幸子 (2014)『幼稚園・保育所の先生のための 障害児保育テキスト』教育出版 pp. 32

注2) 西木貴美子 (2013)『保育士養成校の学生が考える障害児保育の専門性—KJ 法を用いたスモールグループディスカッションによる検討—』四天王寺大学紀要第 56 号 pp. 217～227

注3) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告) 概要 文部科学省

＜参考文献＞

川合紀宗・若松昭彦・牟田口辰己 (2016)『特別支援教育総論 インクルーシブ時代の理論と実践』北大路書房

八幡ゆかり (2012)『わが国におけるインクルーシブ教育のあり方—統合教育の歴史的背景を踏まえて—』鳴門教育大学研究紀要第 27 巻 pp. 65～79

文部科学省 初等中等教育局 特別支援課『インクルーシブ教育システム構築事業』www.mext.go.jp (2017 年 10 月 18 日閲覧)

「インクルーシブ教育」で特別支援はどう変わるの?ベネッセ教育情報サイト
<http://benesse.jp/kyouiku/201208/20120802-5.html> (2017 年 10 月 18 日閲覧)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm (2017 年 10 月 19 日閲覧)

<https://h-navi.jp/column/article/35025729> (2017 年 10 月 19 日閲覧)